実践② 慣用句クイズをしよう

使用教材：「慣用句」（四年下）

渋谷区立中幡小学校　杉田充子（すぎたみつこ）

1 はじめに

子どもたちは、言葉にとても敏感に反応し、日常的に耳にしたり目にしたりする言葉や文をすぐに使ってみようとする。また、言葉遊びやさまざまなキャッチコピーなどを覚えては楽しんでいる。

学習指導要領で新設された「伝統的な言語文化に関する事項」の三・四年の指導事項に、本単元で取り上げる「慣用句」が示されている。これは、慣用句の意味を知り、日常生活で用いて言語活動を豊かにすることをねらいとしている。

慣用句は、二つ以上の語が結び付いて元の意味とは違った特定の意味を表すものである。子どもたちは、「慣用句」という言葉は知らなくても、これまでに耳にしたり使ったりした経験をもっているだろう。慣用句の意味や使い方を知り、日常的に適切に活用できるようになれば、伝えたいことをわかりやすくしたり会話を楽しんだりすることができるようになる。

本教材では、国語辞典や慣用句辞典などを活用して慣用句を調べ、「慣用句クイズ」を作る。クイズを考えたり、クイズを出し合ったりする活動を通して、慣用句の意味や使い方に親しみ、日常生活においても使ってみようという意欲を喚起したい。

2 指導計画（全三時間）

本単元のねらい

長い間使われてきた慣用句の意味を知り、生活の中で使うことができる。

第一時

①教材文の中の「火花を散らす」を参考にしながら、導入を行う。

②二つ以上の語が結び付いて、新しい意味をもつ決まり文句であることを知る。

③「馬」「竹」「頭」などのように、慣用句の中心になる言葉を辞書で引いて、意味や使い方を調べる。

第二時

①自分の使ってみたい慣用句を見つける。

②意味を調べ、文章に当てはめる。

③使い方を調べる。

④調べた慣用句を使ってクイズを作り、問題を出し合って楽しむ。

3 指導の実際

第一時

> がんばれ赤組、がんばれ白組。
> 両チームのおうえんだんが、
> 火花を散らしています。

この教科書P28の例文に対して、「あぶないよ。本当に火花が出たら」「お互いに、見合っている感じかな」という意見が子どもたちから出された。そこで、辞書で「火花」の項目からたどれることを知らせ、「火花を散らす」という「慣用句」であることと、その意味を調べさせた。

さらに、教科書を参考に、「体や心」「動物」「植物」「かたかなの入ったもの」もあることを確認させる。子どもたちから「腕が上がる」「腕が落ちる」という慣用句が出され、体の一部を使った慣用句の例として意味や使い方を考えさせた。

「どんな短文が作れますか」と問いかけると、「料理がおいしい。腕が上がったね」「料理がおいしくない。腕が落ちたね」という短文が出された。聞いたことがあると子どもたちは、ますます慣用句に興味を示し、自分なりの予想を立てながらP29の問題に取り組んでいった。

言葉そのままに受け取ると、おかしな意味になってしまうこともある内容が、慣用句としてなら、よりわかりやすい表現となるおもしろさに、子どもたちは気づくことができたようだ。

第二時

「自分の使ってみたい慣用句を見つけ、クイズを出し合おう」と、ワークシート（『小学校国語ワークシート集』光村図書　四年P105）を配る。クイズに出す慣用句が決まったら画用紙に書き、自分の考えた短文を付け足し、短文の裏には、慣用句の意味を書くようにさせる。

クイズの出し方は二通りで行う。

①短文をヒントに慣用句の意味を答える。

②慣用句を紹介し、意味を二択から選ぶ。

子どもたちは、前時の慣用句の調べ方を使って、自分がクイズで出したい慣用句を探し始めた。国語辞典で中心になる言葉から調べたり、活用例を参考にしたりしながら、クイズにしたい慣用句を選び、慣用句を使った短文を自分で考えた。

クイズを出し合う活動は、生活班のグループごとに行った。

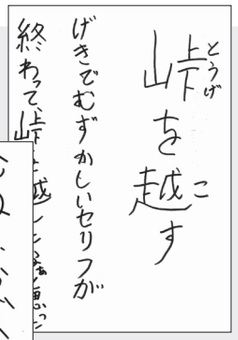
①意味を問うクイズ例

・胸を借りる

（今日の試合の相手は、前回優勝チームだ。胸を借りるつもりでがんばろう。）

・峠を越す

（劇で難しいセリフが終わって、峠を越したなあと思った。）



児童がつくったクイズ。裏面に意味が書かれている。

②二択のクイズ例

・胸をおどらせる

A. わくわくしながら抽選の発表を聞いた。

B. おどりながら抽選の発表を聞いた。

子どもたちは、自分の知っている慣用句はもちろんのこと、意味がわからない慣用句についても、短文を参考にしながらクイズに答えようとしていた。子どもたちは、クイズを出し合うという楽しい活動を通して、慣用句はおもしろい、もっと他の慣用句も調べてみたい、使ってみたいと関心を示した。

4 おわりに

二時間の学習であったが、子どもたちは進んで辞書を引いて、自分が使ってみたい慣用句を見つけ、クイズを楽しむことができた。互いにクイズを出し合う活動を取り入れることで、子どもたちは、より慣用句を身近に感じることができた。

クイズの他にもカードにまとめて本にしたり、朝や帰りの会のスピーチなどに使ったりするなどの展開が考えられる。言葉への関心を高め、学習内容の日常化を図ることが大切である。